

第2期第6回（平成24年第2回）帯広市産業振興会議

（第2グループ）議事録要旨

平成24年8月3日（木）10:00～

帯広市役所10階第2会議室

I. 開会

II. 会長挨拶

III. 協議

1. 会議の進め方について

事務局より、資料に基づき会議の進め方について説明があった。

2. アドバイザー自己紹介等

アドバイザーの北海学園大学 大貝 健二 准教授から、自己紹介を兼ねた話題提供をいただいた。

（大貝准教授）

中小企業振興基本条例や産業振興ビジョンに基づく取組みとしては、墨田区や大田区、大東市、東大阪市などが先進事例として挙げられる。

墨田区では、1970年代から事業所が郊外へ流出し、空洞化への対応が課題となった。そこで、実態調査を実施した上で「3M運動」を展開し、ものづくりを観光、販売にまでつなげる地道な取り組みが続けられている。

東大阪市では、大手の下請企業が集積しているが、互いに取引関係がなく顔が見えなかったことから、ビジネスプロモーターによる橋渡しの取組みが展開されている。

京都市では、伝統産業が盛んである一方、中堅のベンチャー企業のモデルとなっており、注目度が高い。「ベンチャー目利き委員会」を設置し、そこで認定された企業には優遇措置を講じている。

帯広市産業振興ビジョンの「1. 中小企業の経営基盤の強化」については、短期的には、金融円滑化法の期限が切れて持ちこたえられない企業が出てくることにどう対応するか重要。また、中長期的な対応も考えていく必要がある。

「5. 集客・交流産業の振興」については、地域資源を活用していかにストーリーづくりを進めるかが重要。

3. 意見交換

帯広市産業振興ビジョンのうち、「1. 中小企業の経営基盤の強化」、「5. 集客・交流産業の振興」について、事前アンケートを基に意見交換を行った。

(1) 「1. 中小企業の経営基盤の強化」について

(委員)

メガソーラーについて、ホームページで立地候補地の地目や面積などが閲覧できる自治体があるが、北海道内ではあまり見られない。スマートグリッドの活用など、取り組めることは色々あると思う。

(委員)

中小企業にとっては、顧客の確保が一番の経営基盤。市場環境が日々変わる中で、チャレンジし続けるよう意識改革が重要であり、担い手の育成が大切。

(大貝准教授)

墨田区では、「フロンティアすみだ塾」という事業を通じて、企業の後継者が集まり、どいうビジョンやビジネスプランで事業を行うか、月1回ペースで1年かけて議論している。

(委員)

中小企業家同友会では、高校生と企業をつなげたり、大学生に地元に残ってもらえるような取組みを進めている。

(委員)

十勝の気候、文化などが好きで帯広に来る学生が多い。働き口があれば学生は残る。

(委員)

優秀な女性人材を生かし切れる企業がどれくらいあるか。地元に残ってもらえる魅力を打ち出していないと定着につながらない。

(委員)

新卒者就職説明会は札幌での開催が多いが、地元でインターンシップをより一層実施すれば、やりたい仕事の発見につながるのではないか。

(委員)

地元の企業や商品をどう発信するか、具体的に考える必要がある。インターネットも活用し、十勝の魅力や商品などの情報を流していくべき。

また、十勝の経済は他地域と比較してよい状況だと言われているが、個別に見れば非常に厳しい状況の事業者も多く、詳細を把握する必要がある。飲食店は増えているが、限られた顧客の奪い合いとなっている。ビルの空き店舗も目立つようになってきた。顧客は景気動向にすぐ反応するが、各店舗はすぐには対応できていない。経営者は、変化に的確に対応できるよう情報を求めている。

個々の状況を把握していけば、どのような対策を行えばよいか、アイデアが生まれてくるのではないか。

(大貝准教授)

今後どこに焦点を当てた対策をとるべきかを考える上でも、個々の実態把握は重要。

(委員)

これまでも様々なアンケート調査が実施されてきたが、件数が多く十分に理解できていない。

(委員)

首都圏の大手企業に採用に関する情報発信を依頼すると、相当の費用がかかるが、例えば、インターンシップとして学生に企業インタビューをしていただき、編集、発信してはどうか。学生にとっては勉強になり、企業にとっては情報発信の経費節減につながる。

(委員)

インターンシップはよい方法だと思う。大学ではインターンシップに取り組んでいるか。

(委員)

インターンシップは必修ではないが単位になっており、報告会も行っている。

(委員)

自分が学生の頃、3週間の職業体験に全員参加したが、謝礼や交通費、宿泊代を負担してもらった。そうした制度があれば、帯広に行ってみようという学生も出てくると思う。

(委員)

進学のため市外に転出した学生をいかにUターンさせるかについて、様々な方法を考えている。OB会のネットワークを活用して情報を流し、学生を集めて説明会を行うなどの案が出ているところ。

(大貝准教授)

インターンシップでは、受入企業の経営者に、これからの夢や、なぜこの仕事に打ち込んでいるかなどを語っていただくことが重要。訴えかけるものがあれば、感化される学生もいる。

(委員)

大学では、若手経営者の話を学生が聞く機会を設けているが、逆に学生の話を経営者が聞く機会を持つのも面白いと思う。

(委員)

地元のためなら、自分の人生や仕事観などについて話をしようという経営者はいると思う。

(委員)

そうした機会を通じて、学生の意識付けをすることが重要。学生にとっても、大きな経験になる。

(委員)

大学教育においても、できるだけ早い段階から卒業後のイメージを持たせることが重要になってきている。

(委員)

帯広にどういう会社があるかを早い段階から理解すれば、その後の学生生活も変わってくるだろう。

(委員)

金融円滑化法が3月で失効する。最悪の事態を想定する必要があるが、実際の対応は難しい。

(委員)

キャッシュフローがあっても借入金返済額を下回るため倒産に至るケースがある。資金計画の立案に対する支援があればよいと思う。

また、国際観光基準に適合する事業者を対象に、固定資産税の軽減措置や特別償却などが可能になれば、経営基盤の強化や設備投資を後押しにつながると思う。

(委員)

太陽光発電設備などは初年度に即時償却できるが、ホテルなどはRC構造で償却期間は47年にわたり、認められる経費が少ないため、課税額が大きくなる。

(委員)

農業では特に肉牛関係で多額の設備が必要となるが、一戸で整備するのは大変なので、農協が所有してリースする形態を採っている。

(委員)

沖縄では空港発着料が免除されている。観光客からの収益で税金を支払うという考え方。

(委員)

資産ではなくフローに課税することになればよいと思う。

(委員)

地元資本と域外資本との差別化なども考えられる。

(委員)

それはこれまでとは逆の発想。域外から立地する事業者の方が負担は少ない。

(委員)

新千歳空港ととちぎ帯広空港のチャーター便の着陸料は、どちらが高いのか。

(事務局)

新千歳の方が高い。帯広は4分の1に軽減しており、チャーター便は3万円程度。ターミナルビルの使用料等を含めると10万円程度になっている。

(2)「5. 集客・交流産業の振興」について

(委員)

海外からの観光客を増やすため、LCCを呼び込むべき。また、外国人から見た魅力という点で、日本的な体験ができる機会もあるとよい。

(事務局)

とちぎ帯広空港はターミナルビルが狭いため、国内線の空き時間にチャーター便を受け入れているが、往路は他空港を利用した人が復路はとちぎ帯広空港から搭乗するという例もある。また、LCCは1週間で往復20万人程度の需要がないと、路線維持が難しいと聞いている。

(委員)

空港の利便性を高めるために、朝一便をとちぎ帯広空港発にする構想はないか。

(事務局)

航空会社に要請しているが、利用者の確保と初期投資が課題。

(委員)

ナイトステイは北海道内では新千歳空港だけか。

(事務局)

現在は新千歳空港だけとなっている。

(委員)

ビジネス利用の割合は少なく、観光需要の方が多いと聞いたが、実態はどうか。

(事務局)

とちか帯広空港の場合は、ビジネス利用は概ね3～4割、冬場は5割くらいあり、他空港よりもビジネス利用が多い。現在、朝一便の利用が最も少ないが、逆に朝一便が最も多い状況になれば、ナイトステイの可能性も出てくると考えている。

(委員)

地元住民の利用割合はどれくらいか。

(事務局)

概ね3割となっている。

(委員)

今年5月～7月の利用状況はどうか。

(事務局)

5・6月は昨年対比、一昨年対比とも増加した。7月は、昨年は一昨年対比で増加したが、今年は若干減少した。

(委員)

ＬＣＣをとちか帯広空港に呼び込むことよりも、海外から羽田空港や成田空港、新千歳空港に来る観光客をどう十勝に呼び込むかが課題ではないかと思う。

(委員)

地元住民が、十勝・帯広の観光地をそもそも十分に理解していない。十勝・帯広の観光地を明確にするため、「観光地総選挙」などを実施してはどうか。その上で、人員を配置するなど、きちんとした観光地になるように取り組んでいくべき。

(委員)

選定された観光地に、ボランティアガイドを配置することも考えられる。

(委員)

十勝・帯広は稲作文化ではなく牧野文化であり、風景を見ると違う土地に来たという印象を受ける。その意識的な演出も必要。十勝は観光ポイント間の移動距離が長いので、景観もしっかり整備する必要がある。景観条例などを制定して、ドライブを楽しめるようにしてはどうか。最近では、こだわりの一人旅に関するガイドブックにも、十勝の風景が掲載されている。そうしたニーズに対応していく上でも、景観の整備は重要。

(委員)

例えば、首都圏などで応援団を募り、デジタルフォトフレームで十勝の風景を流してもらってはどうか。

(委員)

情報誌などを活用して、読者が選ぶ十勝の観光地ベスト10を選定するのも面白い。

(委員)

駅周辺に「馬」を感じるものがないが、馬をひいたりしてはどうか。

(委員)

札幌では馬車が動いている。

(委員)

浅草などでは、人力車もなかなか商売になっているようだ。

(委員)

自転車を活用したペロタクシーの例もある。駅を降りた時から帯広らしさを感じられるしくみがあるとよい。

(委員)

海外旅行等で「本物」を目にする機会が増えている。類似したものを見せるのではなく、十勝の本物をPRすることが大切。

(大貝准教授)

十勝の魅力は何かということ共有するとともに、域外の人が何を期待するかをマッチングさせていくことが重要。

大型バスツアーよりも家族単位の旅行が増えているので、家族向けの観光モデルを提示していく必要がある。

外国人が個人で十勝に観光に来た場合に提供できる素材があるか、中国語で話せる人がいるか。そうした要素も必要。

また、農業体験ができる場所が多くなってきているが、食べる、見るばかりでなく、少しでも体験を織り交ぜていけば、リピーターが増えていくと思う。

IV. その他

連絡事項等は特になかった。

V. 閉会